

むろらん戦後60年

還暦を迎えた わがまちの戦跡を訪ねて



工場構内の不発弾処理（昭和50年）



防空ごうは市内に約450カ所掘られた
（写真は避難する庁立室蘭高等女学校（現・清水丘高校）の生徒）



病院で行われた負傷者緊急搬送訓練



米軍による艦砲射撃の被害（日鉄・乾鉱工場）

今年4月、鹿児島県の中
学生4人が防空ごう跡の中
で死亡する事故が起きまし
た。

市でも、市内に残る防空
ごう跡などを実態調査し、
2カ所を封鎖しました。

市内には、防空ごうのほ
か要塞築城跡や、今は姿な
き旧市立総合病院地下診療
室跡など、戦時下の記憶を
よみがえらせる場所が数多
く残っています。

先の戦争において、空襲
や艦砲射撃などで多くの尊
い命が失われた室蘭。

戦争の記憶が薄れていく
今日、私たちはあの悲劇を
歴史上の出来事として片付
けることはできません。

終戦60年の節目の年に、
歳月の風化にさらされなが
らも、残されている戦跡を
訪ね、平和とは何か、平和
の大切さを考えます。

全容不明のまま、姿を消した 室蘭防衛陣地跡（砲座跡）

八丁平



夏草に隠れて、姿を隠していた砲座跡

日本本土決戦に備えて、室蘭の軍需工場を死守するための陸軍防衛司令部が、八丁平地区に設置されていた。軍事拠点として、飛行場や高射砲陣地など最終決戦のための総力を集結していた。

室蘭防衛部隊の活動は、今もなお謎の部分が多い。室蘭飛行場は昭和18年完成の陸軍用。飛行第63戦隊の駐留もあり、滑走路の長さは約550メートル、幅約20メートルで芝地。

現在、中央自動車学校などが建っている。戦後の土地区画整理事業の急速な拡大とともに、終戦時に残った地下司令部跡をはじめ、すべての軍事施設は解体撤去され、高射砲陣地の砲座跡の全容は不明のまま、その姿を消した。

生い茂ったささやぶをかき分け、未整地の丘を調査。苦労の末、土中に埋もれたベトンの一部を確認したが、ここでも戦争のこん跡が失われつつあった。



幻となった室蘭飛行場(右)と
当時の防衛陣地跡(上)

空襲の恐怖を物語る 横穴式防空ごう跡

海岸町、御崎町



夏草の陰に今も残る防空ごう跡。
海岸町(右)と御崎町(上)

終戦時の記録で、室蘭市内各所に公共用横穴式防空ごうが16カ所、総延長748メートルが掘られていた。また、町会や学校、民間を含め、掘られた防空ごうの数は、約450カ所に及ぶ。敵機来襲と無差別爆撃から身を隠すための防空ごう掘りは、生きるための必死な作業だった。

防空ごうには横穴式と掩蓋式(たて穴形)がある。横穴式は岩山斜面が選ばれ、掩蓋式は平坦地に掘られた。

海岸町の道道室蘭港線沿い「港の文学館」近くの高さ約15メートルのがけ下では、平成14年夏に未完成の特殊地下ごうが発見された。4本の横穴が中央に土柱があるホールに集まり、さらに奥へ3方向に通路が分かれ、その先に部屋があった。後に、旧国鉄札幌鉄道管理部による地下避難事務所と判明。この巨大地下ごうは、内部崩落の危険があり、直ちに開口部はふさがれ、その後、防災工事で消滅した。

また、JR御崎駅近くの裏山斜面にある約2メートル四方の小さな防空ごうが、今もなお当時のまま、夏草の茂みの陰で、まるで空襲の恐怖を物語るかのように穴の口を開いている。

ベトンの重量感が威圧する 室蘭要塞築城跡（砲台跡）

小橋内町

潮風吹き抜ける高台の閑静な住宅地の一角に、ツタのからまる、巨大な城壁が残る。高さは約5メートル、厚さ約2メートルの「ベトン（ベトン、フランス語でコンクリートを意味する）」が重量感むき出しに迫り、威圧される。

北部軍管区司令部が室蘭の軍需工場を守るため、噴火湾侵入の敵艦を阻止、撃滅する目的で築いたのがこの室蘭要塞。17メートル四方ほどの箱を伏せたような砲台内に96式15センチ加農（カノン）砲と10センチ加農砲の2門がそれぞれ納まる砲座があった。

室蘭要塞築城隊（工兵約300人）が4カ月がかりの突貫工事で昭和20年6月に第1砲座、同7月に第2砲座を完成。昼も夜も休みなく作業を続け、築城のセメントや水、鉄筋を高台へ運び上げ、短期構築の苦闘を重ねた。

しかし、念願の砲座が完成した直後の7月14、15日に室蘭を空襲と艦砲射撃が襲った。

厚い壁の奥に、今も残る不気味な砲窓は暗く、なすすべなく、すべて徒労に終わった無念さを伝えている。



ツタに覆われているが、今も残る
室蘭要塞の砲台跡

兵士が双眼鏡で見張っていた 要塞付属観測所跡

測量山



石垣と土に埋もれた軍事観測所跡

室蘭港を一望できる測量山山頂へ至る急な坂道を登りつめた所に、夏草に覆われ、山腹にへばりつくようなコンクリートの帯が見える。出入り口は、石垣と土の中に消え、こん跡は見当たらないが、終戦当時、港湾監視の軍事観測所が築かれ、横長の監視窓から兵士が双眼鏡で見張っていた。

小橋内にある室蘭要塞の付属観測所として築かれ、敵の侵入をいち早く連絡するのが目的であった。



地獄図のような 野戦病院と化した 旧市立総合病院 地下診療室跡

常盤町、幕西町



地下トンネルを掘削し、野戦病院と化した地下診療室も今は見ることができない

旧市立総合病院（常盤町）の地下診療室は、旧料亭「常盤」（幕西町）と結ぶ約50メートルのトンネルであった。昭和18年以来、海軍陸戦隊指揮下で病院関係者や地域住民による総がかりの勤労奉仕で掘り抜かれた。

人が立って歩ける高さで幅約4メートルの通路は、爆風よけの「くの字」型に曲がった構造。手術室など3室が設けられ、空襲時の避難診療室になっていた。昭和20年7月14日の米軍による室蘭空襲の際、港の艦船が数多く攻撃されて、大破、沈没。かろうじて、救助された負傷兵

戦況の起死回生をねらう 特攻艦①号出撃基地と思われる戦跡

増市町ハルカラモイ

陸軍砲(あかつき)部隊の軍事活動は、今もなお、謎に包まれている。

室蘭駐屯部隊の一部が市民の絶対立ち入り禁止区域で、何らかの機密作戦を練り広げていたことは、いくつもの目撃証言としてあったが、実態は不明。

漁師の古老たちの話では、部隊の厳重な警戒のため、終戦までハルカラモイ海岸沿岸に接近することは厳禁だった。

そこは、大正期から築港埋め立て用石材の切り出し場として利用され、通称「なかの現場」と呼ばれた磯浜があるが、断が絶壁で人が近づけない難所だった。

一方、最近の戦時下の史実調査では、陸軍特攻艦①(マルレ)号(連絡艇の略号)が本土決戦に向けて造船され、鹿部、室蘭、登別配備がひそかに進められていたことが判明。

この陸軍特攻艦①号は、小型の自動車エンジンを用い、スギまたは松板で作られた全長約7メートル、幅1.5メートルの一人乗り爆装特攻艇。300キログラムの爆薬を積み、敵艦に体当たりする。海軍魚雷艇「震洋」よりも小型ながら戦法はほぼ同じであった。



特攻艦①号の模型

出撃基地のこん跡を求め砲部隊の影

を追って、ハルカラモイ磯浜の調査を行った結果、

「なかの現場」で高さ約100メートルの断がい中腹で、磯から約20メートルの位置に、人工のもの

と識別できる四角い穴を発見。船舶監視所(見張り台)でもあったろうか。

沖縄戦でも同様に見張り用の穴が特攻艇格納洞くつと一緒に掘られていた。

付近には、岬を貫通する海蝕洞くつなどが無数に口を開き、船の接岸可能な水深をもつ平坦で大広間のような岩場もあった。ここも基地であつたかもしれない。

波が静かに岩場に打ち寄せていた。



小船の通行可能な貫通洞くつ(上)と監視所らしき人工の穴(右)



海上から唯一、船を横付けできる平坦な岩場

これまで見てきたように、室蘭市には防空ごうなど、多くの戦跡が残されています。

それは先の大戦において、道内で唯一の艦砲射撃と空襲を受け、「戦時災害罹災状況調査書」によると、一般市民のみで、死者436人、重軽傷者49人、被災世帯1千941世帯にのぼることからうかがい知ることが出来ます。

近年、平和の重要性が叫ばれる中、多くの市民の請願により、平成11年、平和都市宣言が出されました。

私たちは今一度、宣言文の精神にたち、平和の尊さを考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

平和都市宣言文

平和で安全な暮らしは、みんなの願いです。

世界で初めての被爆国である日本は、核兵器を「もたず、つくらず、もちこませず」の三原則を守り、平和の尊さを世界に伝え、核兵器をなくしていかなければなりません。

恵まれた自然を守り、平和で幸せな未来を子どもたちに引きつぐことは、戦争で多くの大切な命を失った室蘭市民のつとめです。

ここに、私たち室蘭市民は、戦争のない平和な世界を願い、明るく住みよいやすらぎのある市民生活を守るため、平和都市を宣言します。

文・市史編さん担当 久末進一さん

取材協力

市史編さん担当：本野里志さん

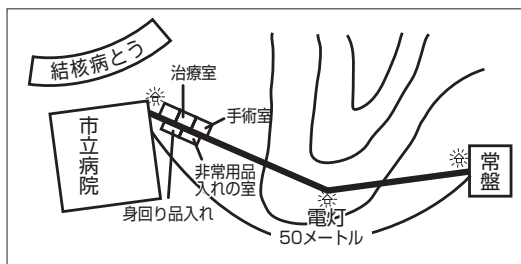
資料提供：花輪文男さん、

福原信之助さん

など、多数がこの地下の診療室へ運びこまれ、まさに地獄図のような野戦病院と化した。海水と重油でずぶぬれに汚れた重傷者の緊急手術が、麻酔も充分でないまま繰り返され、やむを得ず、救命のために、手足の切断が行われた。裸電球の光も乏しい暗い手術室の中に、血の匂いがあふれ、トンネルに苦痛の絶叫とうめき声がかぎりました。負傷兵はほとんどが死亡。後には、彼らの切断された血みどろの足がバケツに山のように積まれて残ったという。

現在は、防災上の理由から両入口を閉鎖。旧市立総合病院側の入口は、石垣で覆われ、「常盤」も平成11年に解体。裏山斜面にあった開口部は、どこにあったのかわからなくなっている。

旧料亭「常盤」のあった裏庭には、今もなお残る立派な庭石の間からシヤクナゲの白い花が、いまわしい戦争の記憶をなくさめるかのように咲いていた。



旧市立総合病院と料亭「常盤」を結ぶ地下トンネルの地図